

5. 【研究者を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等】

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人の研究者としての資質、研究計画遂行能力を評価するために以下の事項をそれぞれ記入してください。

- ① 研究者を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等
- ② その他、研究者としての資質、研究計画遂行能力を審査員が評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績、受賞歴、飛び級入学、留学経験、特色ある学外活動など）

① 研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等

【研究者を志望する動機】

申請者が研究者を志すようになったのは、純粋な未知解明への喜びと、それを通じて社会に貢献できることを認知するようになってからである。

申請者は子供のころから、未知にたどり着くことに強い喜びを覚えていた。例えば、スパイスの配合、コーヒー豆のブレンドの比較検討が趣味で、新しい味に出会う度に条件や味の感想をノートに取ってきた。学部学生になって研究室に配属されると、研究が趣味の延長線上にあるように感じ、実験に没頭していった。この頃に携わった『肝癌浸潤抑制』は決して楽なものではなかったが、抑制機構が明らかになったときには、大きな喜びを感じた。同時に、肝癌に苦しむ患者を救える可能性が示唆できたことに、やりがいの様なものも感じていた。そして、大学院に進学し、遺伝子治療に取り組むうち、誰かの役に立ちたいという思いがどんどん膨れていった。未知解明に没頭でき、人の役に立つ、そんな天職とさえ感じる研究者を目指さない理由が思い当たらなくなっていた。

【目指す研究者像】

申請者が目指すのは、科学的根拠に基づいて積み上げた成果を社会に還元できる研究者である。

前述の背景から研究者を志した申請者は、自身の研究成果を広く人の役に立てたいと考えている。そのために、国際的なコミュニケーション能力や社会への説明力が不可欠である。前者に関しては、日常的に語学の勉強に取り組んでおり、国際英語検定試験 IELTS において大学院留学に耐え得るとされるスコア 7 (最高点 9) を獲得した。後者に関しては、最新の論文を大衆向けに紹介するブログを運営している。自身の成果ではないが、研究成果をやさしく伝える練習になると考えている。

【自己の長所等】

様々な研究分野に携わってきた経験から、分野の垣根を越えて研究を展開する力を養ってきたのが申請者の長所である。

申請者は、これまでに、肝癌浸潤や核酸医薬創成、ゲノム編集や生殖生物学と様々な研究分野に携わり、学会発表や論文としてまとめる成果を残している(業績欄 1-1) (Onra S. et al., Exp. Anim., 2018 under review)。また、大学院進学時には、異分野融合をテーマとする「生体統御ネットワーク医学教育プログラム」にも採用された。そこでは、免疫学や再生医学、神経科学といった様々な研究分野について学んでいる。

こういった経験と学習から、分野の枠を超えて研究を展開する力が徐々に身につくようになってきている。例えば、本研究において神経疾患に着目できたのは、異分野にも広く視野を持っていたおかげである。また、免疫学の論文から得た着想を提案し、独自のテーマとして遂行している。まだ種まきの段階であるが、この研究が花開いた暁には、造血幹細胞の遺伝子治療への応用が期待できる。今後も、分野を超える柔軟性を生かして、学術研究に携わっていきたいと考えている。

② 自己評価する上で、特に重要と思われる事項

申請者は大学生時代、学科主席の成績 (GPA:3.74/4) を修めて、学位記の受領代表を務めた(業績欄 6-3)。その過程で、大阪大学から成績優秀者の 50 名として(一学年 4000 人中)優秀賞を頂き(業績欄 6-1)、採用されていた小野奨学財団から合計 2 度の成績優秀賞を頂いた(業績欄 6-2)。また、大学院入試では、過去 5 年の最高点を大きく塗り替え、首席で合格した。

大学院に入学してからは、採用枠 10 名以下の「生体統御ネットワーク医学教育プログラム」にも採用され(業績欄 6-4)、融合研究を展開できる人材を育成するという理念のもと、日々精進している。また当プログラムの「定例研究ミーティング」では、優秀ポスター賞を頂く(業績欄 6-5)など、申請者の研究活動についても一定の評価を得ている。